若根七湯琴

十

ル 4
1124
10

門ル 4
1124
巻 10

帝室博物館図書之印

箱根七湯纂类の十

産物の部

目録

一箱根権現畧縁記並宝物ホ
一同湖水並古哥紀行
一同産物図考
一姥子の湯
一四季勘考

帝国博物館蔵

筥根権現

右木花開耶姫命
中彦火々出見尊
尤瓊々杵尊

末社駒形神　大師堂　行者堂　薬師堂　上人堂
高野祠　曽我祠　阿弥陀堂　獅子巌　御供所
熊善祠

別當　東福寺　金剛王院　社領二百石

例祭　六月十三日

畧縁記

夫箱山の初を尋ぬるに上人此所の地にして神威顕
然たる霊験を保ちしかや孝安帝の門
前に湖水の中に月代本を建て相模三国の

堺にして駿州帝の御宇に韓国の高根権現を勧
請し此山の形梵語にて筥根山と号け
湖中の怪石を以て宮殿とし又宇をたて崇め
居と雖ども湖水の堂塔を浮べ厳底に角食
山に仏会大士も降臨し給ふ厳底に角食
泉と名付給ふ故に東福寺と号し山岳林
九十所の名僧多し都て乗の内院にして
修験林の神勅を受け給ふ陽を山先南山と称し
孝霊三年世時宮根三社権現を崇め給ふ上人と
中相に諸国の霊験一万三千余及び八幡宮東
法人万老上人を尊ぶ又湖水の西の岡に九体の大乗
妙経十巻を埋め上人彼の岡に
隠れて神咒を唱へ毒竜水に下り及び阿鼻獄の

[illegible]大樹の下に[illegible]山の[illegible]後
[illegible]（[illegible]樹を梅極[illegible]）[illegible]に七年[illegible]万[illegible]
初を造[illegible]落[illegible]四路[illegible]別 楊邪郡[illegible]
[illegible]迦[illegible]と南山[illegible]内[illegible]仏像[illegible]別四方
郡[illegible]一寺を建[illegible]
[illegible]又の名を小[illegible]根[illegible]
[illegible]帝[illegible]て七代の[illegible]
[illegible]
山[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]南山の[illegible]
[illegible]
[illegible]南山の別南[illegible]
[illegible]
[illegible]義[illegible]朝小[illegible]時[illegible]義時[illegible]時[illegible]

[illegible]義[illegible]朝[illegible]
[illegible]
[illegible]南[illegible]
[illegible]朝[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

同宝物等

宗近 太刀　　友切丸（文治長サ二尺六寸 橋倉庵家）　清盛の太刀（南泉作 時宗公）

長岡の太刀（文治 右京大夫 切り上り 十四切り 安倉 太刀之）

（右方[illegible]）

赤木の[illegible]（[illegible]）

夜光の玉　　天狗丸

摺

時宗の状　　時宗[illegible]の文[illegible]

夜[illegible]

駒の角　　九穴の貝

鶴鉢（日上）　　麻の玉

（[illegible]）

[illegible]義[illegible]朝[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

面白き作風なり
東福寺者也
[illegible]

筥根権現湯釜畫

此湯釜武田氏人の
[illegible]
[illegible]
[illegible]

御願円満申東静謐武運長久別當〇眼和尚隆安
并〇山大〇奉鋳〇〇如件　五月一日大工豆州磯部
康廣

又駿河国箱根宿ゟ西へ五町程の内ゟ北へ入り山中ゟ
白中ゟ有り小田原へ行て海ゟ釜ヶ淵と云門あり
この釜ゟ西へ箱根権現の社乃内ゟ二町ばかり
道人ゟ西へ入り山ゟ北へ入り谷ゟ流れ
流れ川ゟ出て西へ廻り谷ゟ東へ
ゟ谷ゟ岡ゟ流れ一流ゟ秀吉小田原陣ゟ
ゟ谷ゟ出て秀吉小田原陣ゟ天正十八年ゟ
谷の流ゟ高ゟ梅ゟ一口の谷の流れ
流れ流れ堂とあり其内の別当陣ゟ大工御ヶ康
康ゟ命して流ゟ流れ流れ

湖水　又芦の湖ゟ富士八湖の一ゟ長三里巾
箱根山の麓ゟ流れ
一里余中ゟ芦尾宿　芦尾宿ゟ石堂宿ゟの名
所ゟ
光行紀行
相模ゟ富士ゟ箱根山の中ゟ
水海ゟ流れ箱根の湖ゟ芦の湖
ゟ桂沢道路ゟ朱橋
紫殿の雲ゟ
ゟ廣家の蒲山言ゟ
ゟ巖宝石金龍の滝ゟ
水心ゟ
ゟ
光行

今ぞしるひとの行末芦の海の浦さびしさを神よまつ

寂蓮集

十月ばかり東の方へ侍りしに箱根の山を見やりてよめる

なべて雲ゆきかよふあやしくもものたのもしかりけり

ゆくすえとて雲ゆきかよふ関とてもなほ谷ごとに

ていまを出づるかぎりの山の本は雲をまとひて

ひがしの空のうちにぞ入れる

寂蓮

梅の花ゆきふる雲を誠にん神のわかりをるる

雪融

玉くしげ箱根の山の峰ごしに見えそめる月新

深草元政身延紀行

山上有湖水一望洗客腸雲髪含雨色天鏡

変風光當得塞翁意何言西施粧身来箱根

頂却似在餘杭

産物之部

鰥奠　又山椒魚とも出雲産の物語に世人かくしかるもの切紙つくりふかくかくれたる男をあるを女奠女あるを男奠と用ひ

奠を百代に伝せの赤ゆかりの沢川をさかのぼれば名ゆゑ岡谷の清水の末に小石の下或は岡もあ

ふるに人ありて形ちを隠むをとるに

法の大きさ夜ふかくとうとく小西屋夜たかく

まろ一篇筆にかく　ち松明一たいを持て奠入る新

八大方行百なり箱の上に小さき宝を明らかにたる

鯲奠 又山桝奠ト云

湯花 明礬 芦の湯ノ産なり

芦の湯産
他国ヨリ
是白シ

硫黄くろ
ねばり
刻みくろ

明礬山ヨリ出ル如此明礬湯の如く
たゞさらさら涌あり故流まてゝ
岩石よりとび出て花のゆしたり
明礬の製法ハ別ヨあり此涌あり
湯と稀ヨ板石黄ーつゝてゝ先
さらし白石のゆし

箱根草

この草箱根山中に生じ
切株花ひらく又芽葉を
節ごとに用ひ苦味
よつてよいと雖なるもの
なり
いませんして疫癘を
逐ふものなりと言ふ
其効ものべ〳〵疫毒に
よるべし

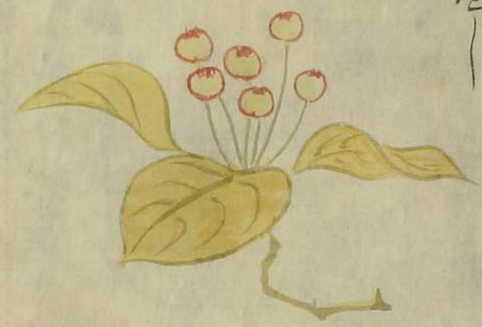
蛇骨

底倉ノ産より
世ニ箱根蛇骨
ト云ふなり

一輪草

一名梅草共ニ
花の間の葉と共に
近世葉を抑花として
其効
武を扇うちに込
花か婦女の種
種子深ていと結婚なり矣
肖の志のべ言葉の

山梨實



莖根の毒を解し酒毒を解し酒毒を用ゆ

木の茎石

色赤し蛇の毒を

木の茎石は
金色にして
形ちにして
とも一寸ばかり
茎にして
形あるなり
木の茎石は形ち解りして
石なり

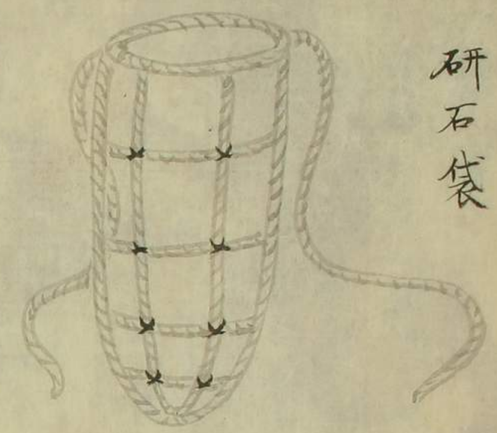
クサメ草

芦の湯の毒を
もらすに鼻よりクサメ
クサメありて鼻のなり
又世に高山芦原温泉
山にもあり香気高し

虎班竹

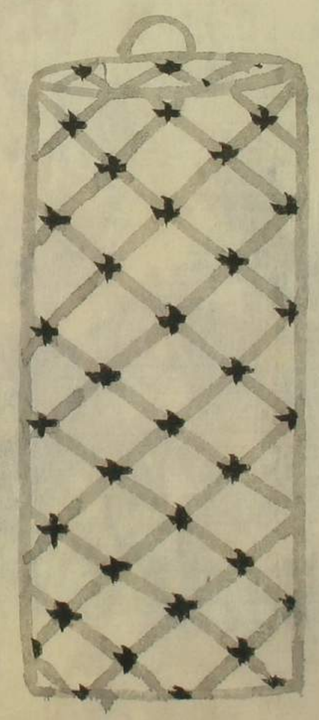
莖根の毒を治す細竹にして
大なる煙管竹なり
多く出る

研石袋



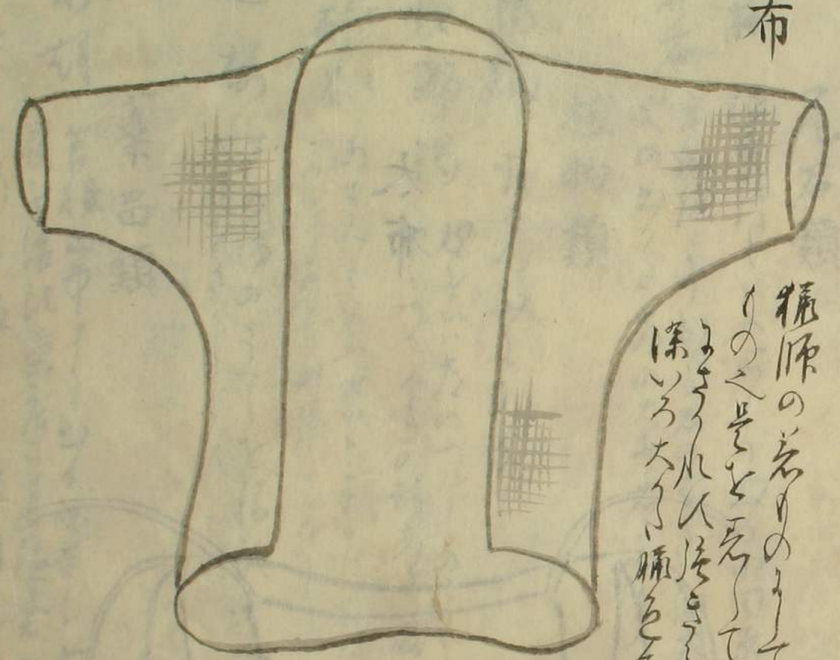
雑史の長き縄にて
編みたるもの

鉈袋



竹根の長き雑史の長き度りて
作りたるもの也 雑物入れて
樹の枝部にて用ひ仕古なれど
よくもかくいき者也

太布



雑師の者なりて度りて御作る
もの也 長きて山へいろ〳〵芝抜
ふるい人居るゆえ長し
深いろ大きく雑色多し

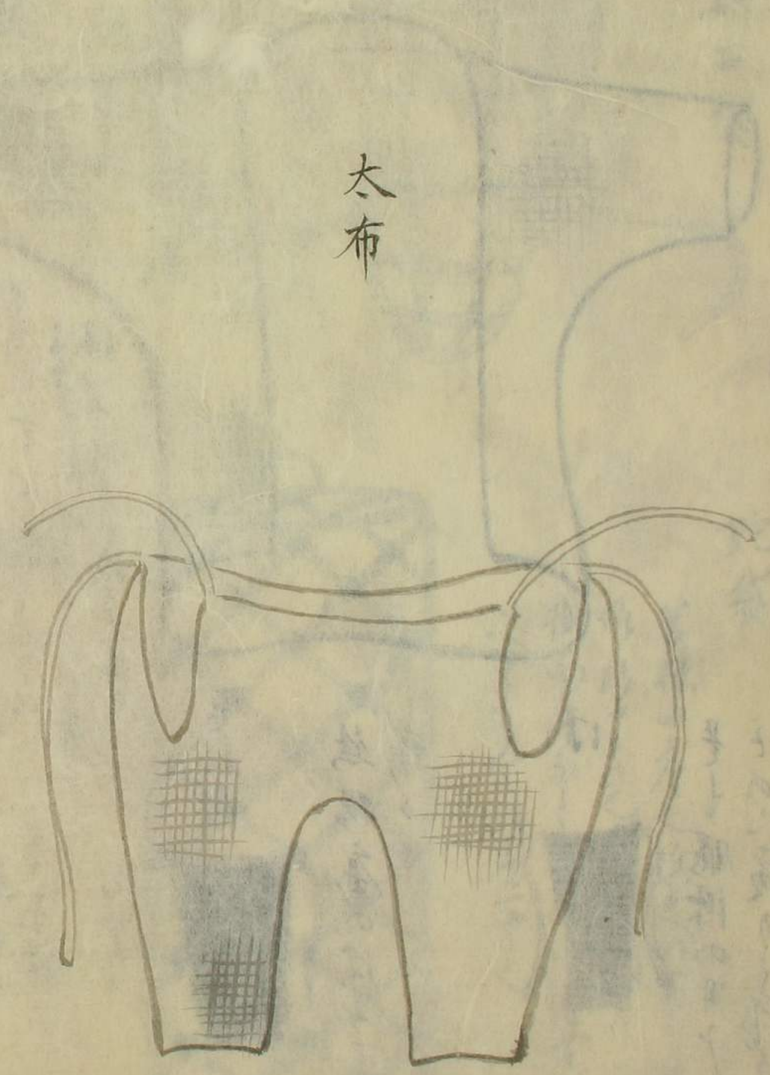
芝抜箒

雑物箒の皮にて
作る

刀

雑師の用ひる
もの也 度りて作る

太布



尾石類

花石 根廣門くらいの石の出る小田原名産なり

火打石 宮城所ならびに石のたくさん細密にしてたくさん
火の出るもの大打石ならびに鶴ヶ崎の大打石と同物

植物類

米節藺 明ケ山にあり

沼陸鄰湯 根葉小花のつくしの如く細長の形あり花形白かくの如くつくしの

馬酔木 あせみ くさいこまくふ小白 花咲ずみ庭
ろくあしの陽多

遅桜 きの陽のさくらを移したもの 所柄の新さて
月をさくらん

藥品類

茱萸 箱根山中に出る味苦く寒熱を除き瘧
疾を治し藥店こまを偽倉茱萸とす

細辛 日光 幸温すして脚風腰とす

刈黄蓮　昔小児麻疹風

魚虫類

鮒魚　答根湖水にあり形大にして味美なり

腹赤　昔より出る形他国より小大にして味美なり

かじか蛙　蛙に似たり形大きく色白し

蛍　屋舎にとぶ形大きく光り毎夜つゆ

神代杖　仙石原より多くいづる桐の枝に似たり形色中に白きあり

禽獸類

鶯　時鳥　雲雀　鹿　猿　鬼　猪

右は新しいつるも多く百ひき麻の腸羹りを上品とす

湯花の製法

芦の湯にて製ス人せい一方芦の湯の流れ出るもとの所につくり凝りを桶に汲りを

物四五人の小舟に茹を乗せ湯花を移

さしまわりに拵へ茹を貫物のごとくに

湯花の茹をくるくるとまきつけ水にひたし

らし板のごとく干物のごとくに

干ものにして上方へ出す

の業なり

明礬の製法

芦の明礬山より原に明礬湯の上へ行事を

かき茹を焼くことくぐるとして茶碗に製人

製法湯の花に似たり明礬山に接

候ことく山の中腹に彼方より明礬山に

蛇ヶ湯の記

蛇ヶ湯明礬湯うてきて眼病ある人に寒熱の
節は不出通るの若の湯と呼て二月
彼岸ゆるすかゝつて通いづる者は必ず湯に
又移ることの節は是て湯と呼て富士の山を冠
この嶽とし家も明なる山新仙家ゆうこゝろ
やはり信濃へ新道あり又ゝ下の根方まで
いづる

小峯新考

箕なせ山のかたちは東南は低くして西北
高くして険しく奥麓舎敷作山うして七
湯とも云寒く暑弱く紀中山の中そう
上芦の湯の方高宮高く雨降ること春は芦越

雲雀山明陸木多く
猪眷雅草根石多
大きくして
すくなく根ことに高西
に常盤木は松杉樅
明〳〵向是と偽〳〵
文の桑ゝ
山中は杜鵑白百合さつき小花
清水
是とい〳〵ともすれ
多裏〳〵家
一己の用々是より如
芦越山吹桜桜山猪落蕨
桜は山の中腹より下は
山上は花小〳〵枝こま
大麻四月を賞
山上矢柄竹は
枝多くして黄色四月の末より
〳〵号して
蛇ヶ湯と
山中は
白百合
花多く
高く大きく光つて根
う上は坂慢をもつて茶寺を
家〳〵
因幡も
一己の用々是より如
麦天も別々は捨せを用は杉々

[illegible]を[illegible]て退き[illegible]紅葉楓
[illegible]ひを帰る[illegible]又芸蘭石こう[illegible]菊
[illegible]こけ[illegible]もの[illegible]
[illegible]を[illegible]桔梗藤とまぶ[illegible]桑
[illegible]山[illegible]を[illegible]て落ちあとちがひ[illegible]翁つ
[illegible]の[illegible]
[illegible]て木の[illegible]秋の[illegible]陽[illegible]帰りを
[illegible]て[illegible]人[illegible]の[illegible]
[illegible]家[illegible]
[illegible]山の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]

跋

下和氏の璞もその人を得されは土砂とこそ[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]の

のもふ様にて居るうち其京地を知るにつれ
を祇園の中末古源 漬菜会作話ふさ〳〵の
まで来りてえんものとて温泉療者の行き
やすらんすると知るに先一部 十奉といふ
世功や 奉家なんハ雅う川 おなの話をえん
又富のくるまるまるに 新心の開開 古源 漬菜の事を
志ふんこゝろ十接九銀九福をも先〳〵第を脱人家り
接せるゝ僧や夫僧不ものかゝるものを発をん
てハ同様をもれ 家青せらるゝ先行へい地すし
不なゝ唯両士の切をとるゝ〳〵つ第〳〵遊すり
志ふハ又化八幸本のゝ

菅根七湯菜十の美〳〵大尾

越嶋老人述